

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 鈴木親彦

本論文は、書物・雑誌の発行および流通が社会に生みだしている文化について、文化資源学の立場から分析した論考である。とりわけ、「出版文化」という曖昧なことばによって対象が一括りに語られてしまっている現状を批判し、日本の出版流通の主軸を担う「取次」という独特なシステムに焦点を絞ることで、この文化が抱えこんだ構造的・歴史的な問題を浮かびあがらせている。そのプロセスにおいて、流通ルートに現れる主体としての出版社や書店や読者など、この文化の形成・再生産に関わる多様なプレーヤーの行動・実践が重要なものとして捉えかえされ、それらが生みだす問題や問題解決の努力が分析されている。

序文では、なぜ文化資源学として、文化政策が取り扱う博物館等の公共施設でも、すでに産業考古学が扱う役割を終えた文化遺産でもなく、現在も大小数多くの企業が存在する出版の分野と、その生産物の流通を対象とするのかが論じられる。そこで大きな役割を果たす「取次」に光があてられる。

第1章では、出版流通を論じてきた先行研究を整理するなかで、「流通」の概念が再検討され、それが多様な経路を指摘しつつもフローとしての一方向の把握に止まり、ストックとしての分析や、プレーヤー間の関係分析を、十分になしえていないことが批判される。そして取次が、仕入配本・物流・営業・開発・金融等の複合的な機能を担うことが論じられ、第2章の歴史的な構造の対象化に向かっていく。ここでその構造の特質の手がかりを得るために、「テキスト共起分析」が利用され、出版流通の文化面と産業面の双方を関わらせて分析していく枠組みづくりの重要性が提起される。

そうした枠組みを踏まえて、第3章では1990年代に試みられた「ジャパンプックセンター」の流通改革の分析が、独自の資料発掘と調査にもとづいて行われる。その書店発・地方発の構想が、なぜ失敗に終わったかの考察から、第4章では、その失敗が前提とせざるをえなかった出版文化が、いかなる形で成立していたかに遡っていく。雑誌流通を軸に形成されてきた構造を、「発売日論争」と「定価販売問題」を手がかりに論じ、第5章における取次を中心に形成されてきた産業の構造分析へとつながっていく。

第5章では、明治中期から戦中期の出版統制にいたる、さまざまな契機を経て形成されてきた出版流通が、2000年以降いかなる問題と直面しているのかが分析され、第6章における多様な主体に基盤をおいた文化の、いわば「せめぎあい」として、出版流通の改革やその方向性をとらえ直す視座が提案されている。

本論文は、まだ更なる拡充が望ましいところや記述の荒削さが残るとはいえ、従来の出版研究やメディア研究が正面から扱ってこなかった大きなテーマに、いかに切り込みうるかを大胆に探った意欲的な研究として評価しうるものである。本審査委員会は、博士の学位を授与するにふさわしいものと判断した。